

# 「易経小解」における熊沢蕃山の易学思想

李 瑩

Kumazawa Banzan's Yi Thought in the “*Ekikyo-Syokai*”

LI Ying

The “*Ekikyo-Syokai*” is Kumazawa Banzan's last work, although there are only the first seven diagrams of sixtyfour diagrams but fully show his understanding and interpretation characteristics. The annotation of Divinatory symbols, Divinatory words, Tuanzhuan, Xiangzhuan and Wenyanzhuan, clearly prove that Banzan not only absorbed the methods from the School of Philosophical Connotation, but also those from the School of Image-numberology and the School of Mind. Apart from this, he also based on the reality of Japan and combined with Yao and political thought to interpret Yi-ology. This also demonstrates Banzan's national self-consciousness as a Japanese scholar.

キーワード：易経、占、心法、治道

## はじめに

「易経小解」は熊沢蕃山（1619-1691）が最晩年に著した著作である。蕃山の伝記『慕賢録』には、蕃山が23歳で藤樹について孝経・大学・中庸を学んだ時、「最精易」<sup>1)</sup>であったと記しており、73歳の条には「日夜疏\_易経\_未\_卒\_業」<sup>2)</sup>とある。蕃山は若い頃から、長きにわたって易の研究に力を注いでいたことがわかる。易関連の著作としては「八卦之図」, 「易経小解」, 「繫辞伝」の三種があり、これらはすべて『増訂蕃山全集』第四冊に収録されている。しかし、管見の及ぶかぎり<sup>3)</sup>では、蕃山の易学思想についてはまだ深く研究されていない。よって、本稿は「易経小解」を対象として考察する。

「易経小解」は、未完の作であるため、六十四卦全体ではなく、乾・坤・屯・蒙・需・訟・師七卦にのみ解釈をほどこしている。ところで、蕃山は「易経小解」の中の「或問」において以下のように述べている。

---

1) 秋山弘道『慕賢録』（岡山県庁, 1959年）, 5頁。

2) 前掲注1『慕賢録』, 18頁。

3) 「蕃山関係文献目録」（宮崎道夫『熊沢蕃山の研究』, 思文閣, 1990年, 618頁-641頁）を調べたところでは、蕃山関係の諸文献に、易学思想についてのものがない。管見の及ぶかぎり、ここ三十年来、蕃山の易学思想を議論した論文も少ない。

或問。吾子が説のごときは伝本義並に諸註の旨に異也。云、伝本義各理あり、象あり。予が説もまた理あり、象あり。易の理一定ならず、一定にして変通せざるは易理にあらず<sup>4)</sup>

蕃山の「繫辭伝」には、「大全ニ見エタリ」とか「本義大全啓蒙等ニ見エタリ」<sup>5)</sup>と書いているので、『周易伝義大全』に収録された程頤（1033-1107）の「周易程氏伝」や朱熹（1130-1200）の『周易本義』を参照したことが明らかである。しかし、ここで蕃山は「易経小解」の説は伝・本義の旨と異なると述べている。

或問、易は卜筮の書也といへり。文王周公の辞も皆占の言ならずや。吾子が解のごときは、人事のうへの道理、受用のみ也。朱子本義の旨にたがへり。云、易は変易交易にして定体定用ありとして理変通せずは、六十四卦は六十四卦に止り、三百八十四爻は三百八十四爻に止りて、理の無窮なることあたはじ。占に用る時は占の言となり、受用にとれば心法となり、家国天下に用れば治道となれり。占は易の一端也。予が解も占にして無筮の筮也。<sup>6)</sup>

蕃山は「易本為卜筮而作」<sup>7)</sup>という朱熹の見解と異なり、「無筮の筮」と述べている。「占に用る時は占の言となり、受用にとれば心法となり、家国天下に用れば治道となれり」というように、蕃山は占いの書として易をとらえるとともに、心法と治道もそこに読み込もうとする。したがって、本稿では占、心法、治道という三つの方面から「易経小解」を検討してみたい。

## 一 占の体例

占の体例については、蕃山は取象説、取義説、爻位説を主として取り入れている。

### 1 取象説

取象説について、朱伯崑氏によれば、「八卦によって各種の物象を象徴し、さらに、八卦が象徴する所の物象によって重卦の卦象を説明し、それによって一卦の卦辞と爻辞を解説し、占う事柄の吉凶を論証する」<sup>8)</sup>という。ここの「物象」について、朱氏は次のように解釈している。

4) 「易経小解」（正宗敦夫編『増訂蕃山全集』第四冊、名著出版、1978年）、331頁。以下、「易経小解」の引用はすべてこれに拠る。

5) 「繫辭上傳」（正宗敦夫編『増訂蕃山全集』第四冊、名著出版、1978年）、431頁。総称は「繫辭伝」であるが、内容は上下に分かれているので、引用の際に「繫辭上傳」・「繫辭下伝」というように表記する。大全は胡広によって編集された『周易伝義大全』を指している。

6) 「易経小解」、339頁。

7) 『朱子語類』卷第六十六（黎靖徳編、中華書局、1986年）、1620頁。

8) 朱伯崑『易学哲学史』第一冊（朋友書店、2009年）、25頁。

春秋時代の占法において、取る所の物象には、乾には天・玉・君・父があり、坤には土・馬・帛・母・衆があり、坎には水・川・衆・夫があり、離には火・日・鳥・牛・公・侯があり、震には雷・車・足・兄・男があり、巽には風・女があり、艮には山・男・庭があり、兌には沢・旗がある。後世の、八卦が天・地・水・火・風・雷・山・沢の八種の自然現象を象徴するという説は、春秋時代の筮法にすでに備わっている。<sup>9)</sup>

つまり、取象説の基本的な考え方は、卦爻の辞と卦爻の象には必然的關係が存在し、その關係を結びつけているものが取る所の物象である、ということになる。ここで乾卦の「初九，潜龍，勿用」の爻辞における朱熹，程頤，蕃山の解釈を見てみよう。

【朱熹】初九者、卦下陽爻之名。……「潜龍勿用」、周公所繫之辞、以断一爻之吉凶、所謂爻辞者也。潜、藏也。龍、陽物也。初陽在下、未可施用、故其象為「潜龍」、其占曰「勿用」。凡遇乾而此爻變者、当觀此象而玩其占也。<sup>10)</sup>

【程頤】下爻為初。九、陽数之盛、故以名陽爻。理無形也、故假象以顯義。乾以龍為象。龍之為物、靈變不測、故以象乾道變化、陽氣消息、聖人進退。初九在一卦之下、為始物之端、陽氣方萌。聖人惻微、若龍之潜隱、未可自用、当晦養以俟時。<sup>11)</sup>

【蕃山】故に聖人卦爻を作て、其象によりてしらしめ給。九は陽数の盛也。故に陽爻に九を用たり。潜は藏也。龍は陽物也。或は大、或は小、靈變不測也。故に陽氣の消息、乾道の變化、聖人の進退に象れり。理は形なきによりて故に象を假て義を顯す。故に龍を以て乾の象とす。初九は陽・初下にあり。このゆへに用ることを恐る。<sup>12)</sup>

蕃山の説を見ると、「潜は藏也，龍は陽物也」という解釈は朱熹に拠っているが、「陽氣の消息，乾道の變化，聖人の進退に象れり。理は形なきによりて故に象を假て義を顯す」という解釈は，程頤に拠っている。朱熹は「伊川説象只似譬喩様説」<sup>13)</sup>と述べ，程頤が説いた象は具体的な物ではなく，象徴・隱喩だという。程頤は王弼本を底本としている<sup>14)</sup>が，王弼(226-249)の「立象以尽意，而象可忘也」<sup>15)</sup>という解釈方法とは異なり，程頤自身は「易因象以明理，由象而知数。得其義，則象数在其中矣」<sup>16)</sup>と述べ，象についても重要視していた。蕃山はそれにより，卜筮の「物象」と義理の「象徴」を結合して解釈を

9) 前掲注8『易学哲学史』第一冊，26頁。

10) 朱熹『周易本義』(中華書局、2009年)、30頁。以下、『周易本義』の引用はすべてこれに拠る。

11) 程頤・程頤「周易程氏伝」(『二程集』、中華書局、1981年)、695頁-696頁。以下、「周易程氏伝」の引用はすべてこれに拠る。

12) 「易経小解」、283頁。

13) 前掲注7『朱子語類』卷第六十六，1640頁。

14) 胡広『周易伝義大全』(『景印文淵閣四庫全書』二版第28冊，台湾商務印書館，2008年)，4頁。「程伝拠王弼本只有六十四卦繫辞以後無伝」とある。

15) 王弼「周易略例」(新編漢魏叢書編纂組『新編漢魏叢書』，鷺江出版社，2013年)，271頁。

16) 程頤・程頤「答張閔中書」(『二程集』，中華書局，1981年)，615頁。

進めていることになる。

また、蕃山は爻位を人の象で解釈している。たとえば、乾卦の爻辞に、次の解釈がある。

(九二、見龍在田、利見大人) 九を以て二五に居は大人の象也。大人は有徳の人也。<sup>17)</sup>

(九三、君子終日乾々) 下の上は諸侯の象也。<sup>18)</sup>

(九四、或躍、在淵無咎)

九は陽剛、四は陰位、人位の上、上の下也。三公九卿の象也。<sup>19)</sup>

(九五、飛龍在天、利見大人)

聖人位に在す時は、天下其沢をかうぶり、万物その生をとぐ。故に象をとれり。<sup>20)</sup>

(上九、亢龍有悔) 臣にして君の上に居は師保の象也。<sup>21)</sup>

このように、蕃山は人の象として「大人」、「諸侯」、「三公九卿」、「聖人」、「師保」などを用いて解釈している。この人の「象」は後の爻位説で大いに利用されている。

## 2 取義説

取義説について、朱伯崑氏は、「卦名の意義と卦の徳とによって重卦の卦象を説明し、これによって卦爻辞を解説して、占う事柄の吉凶を判断する」<sup>22)</sup>という。取義説は取象説と同様、易学と哲学の発展に重要な影響を与えた。朱伯崑氏は易学における義理学派は、筮法の取義説を根拠として発展したものにほかならない<sup>23)</sup>とも指摘している。

たとえば、坤卦の卦辞「元亨，利牝馬之貞」について、朱熹、程頤、蕃山の解釈は次のようである。

【朱熹】牝馬、順而健行者。陽先陰後、陽主義、陰主利。<sup>24)</sup>

【程頤】乾以剛固為貞、坤則柔順而貞。牝馬柔順而健行、故取牝馬之貞。<sup>25)</sup>

【蕃山】乾は剛強にして健行し、坤は柔順にして健行す。地を行ことの達者は、牝馬にをとりざれども、牝馬は柔順無為也。故に象をとれり。坤は大体の聖女也。故に婦人是を師とし則とる也。<sup>26)</sup>

---

17) 「易経小解」、284頁。

18) 「易経小解」、285頁。

19) 「易経小解」、286頁。

20) 「易経小解」、286頁。

21) 「易経小解」、287頁。

22) 前掲注 8, 『易学哲学史』第一冊, 26頁。

23) 前掲注 8, 『易学哲学史』第一冊, 28頁。

24) 『周易本義』、43頁。

25) 「周易程氏伝」、706頁。

26) 「易経小解」、316頁。

「剛」は乾の義で、「柔」は坤の義である。「柔順」は坤卦の徳である。「牝馬」は卦の「物象」で、「牝馬」の「柔順無為」は卦の「義」である。取象説は卦名の外延すなわち物象を重視するのに対して、取義説は卦名の内包すなわち義理を重視する。朱熹、程頤は「牝馬」の徳で坤卦を解釈しているが、蕃山は「牝馬」から「聖女」へ義理の解釈を進め、「女子は柔順なれどもあざむくべからず、犯べからざる心みゆるを貞とす」<sup>27)</sup>と述べている。ここで、「女子」は「牝馬」の同類として「柔順」の義を持っている。そこで、蕃山は「坤は大体の聖女也」と解釈したのである。

### 3 爻位説

#### (一) 爻位と三才の道

『易』では、九は陽の数、六は陰の数である。六爻は奇と偶によって陽位と陰位を分けている。すなわち、初・三・五の位は陽位であり、二・四・上の位は陰位である。そして、六画卦の場合は、初・二は地道の位、三・四は人道の位、五・上は天道の位であり、三画卦（上卦と下卦に分けて見た）の場合は、初・四は地道の位、二・五は人道の位、三・上は天道の位という「天地人」三才の道に当てられる。六爻の位と三才の道とは深く関わっているのである。

乾卦の爻辞「九二、見龍在田、利見大人」における蕃山の説を見てみよう。

六画卦を以ていへば、初二は地道也。二は地の上也。田は地に衆を養ふの至也。地性は衆を養ふ以て道とす。田の苗の生長は、五六月也。五月末よりは気化の雨漸々まれにて、白雨を以て五穀草木を養へり。龍雨の時分也。見龍在田は、龍雨田を養ふの象也。三画卦を以ていへば二と五と人位也。九を以て二五に居は大人の象也。大人は有徳の人也。九二潜を出、隠をはなれて、徳すでに世にきこゆといへ共、いまだ位なくして処士の象也。利見大人とは、上九五の賢君と相遇て、共に天位を共にし、天禄をともにして、道德正教を以て天下を利済する也。<sup>28)</sup>

蕃山は「六画卦を以ていへば、初二は地道也」として、六画卦の天地人三才の道において九二は地道の上にあると述べるとともに、「三画卦を以ていへば二と五と人位也」として、三画卦の天地人三才の道において九二は人位にあると説いている。また、「上九五の賢君と相遇て、共に天位を共にし」のように、九五は天位にあると述べている。この爻辞については、『周易伝義大全』に、「雲峰胡氏曰、龍九象、見而在田。二、象以六画言則初二地位。二、地上。故象田。以三画言則二与五本人位。故九二九五象大人。九二方出潜而猶未大顕、是有大人之徳、未有大人之位者也」<sup>29)</sup>という注がある。これによれば、蕃山の解釈は胡炳文（雲峰）に拠っていることがわかる。そして、三才の道は、社会階層の象と関わっていることも明らかである。

乾卦の文言伝「九四重剛而不中、上不在天、下不在田、中不在人、故或之、或之者、疑之也、故無咎」

27) 「易経小解」、316頁。

28) 「易経小解」、284頁。

29) 前掲注14『周易伝義大全』、73頁。

に対しても、蕃山は三才の道で解釈している。

九四は重剛にあらず、重の字衍文也。九四は剛を以陰位に居、剛柔相兼たれども中を得ず。上卦の下なれば、天にあらず。人位の陰爻なれば、地に遠して田にあらず。地に遠きは人の居べき所にあらず。故に中人にあらず。或は進み或は退きて定位なし。疑て中に不及ことを憂る也。……義の為べき事にをいて其可否を疑ことあり。是卜筮を用る所也。<sup>30)</sup>

ここで、「九四は剛を以陰位に居」というのは、九は陽数であり、剛であるが、四は偶であり、陰位だからである。蕃山は九四を「上卦の下なれば、天にあらず」という。六画卦の場合、四は人道の位であり、天道の位ではない。また、「人位の陰爻なれば、地に遠して田にあらず」といい、初二という地道の位と離れていることを説く。すなわち「地に遠きは人の居べき所にあらず。故に中人にあらず」ということになる。中位というの、地道の第二爻と天道の第五爻である。「九四」は中位ではないため、「疑て中に不及ことを憂る也」という。蕃山はこのように「天地人」三才の位を利用して解釈を行っている。

「天地人」の代わりに、蕃山は「時処位」で『易』を解釈する場合もある。「時処位」という言い方は蕃山の師である中江藤樹(1608-1648)に拠るのであるが、それは「天地人」<sup>31)</sup>のあり方に沿うものである。乾卦の文言伝「或躍在淵、乾道乃革」の解釈を見てみよう。

内卦のはじめと、外卦の四と処同して位異也。時同して行別也。内卦終て外卦始る。運氣あらたまらむとす。故に躍て進まむとす、時いまだ至らず。故に安所をはなれず。或問、何をか初と四と所同して位異なりと云や。云、初は陽位なれども、下卦の下に居て微也。四は陰位なれども、上卦の下に居て尊し。内卦下なる事は一也。乾元用九の時同じけれども、位によりて行別也。或問、何をか運氣あらたまらむとして、時いまだ至らずと云や。云、運氣あらたまらむとして、賢者生れて世中文明也。しかれども九五の位に在す人、賢君ならざれば大に行事あたはず。時未至也<sup>32)</sup>

蕃山は三画卦の内卦と外卦に分けて解釈を行っている。「内卦のはじめと、外卦の四と処同して位異也」にある「処同」というのは、初爻も四爻も三画卦の下の地道であって、「処」が同じであることをいう。「位異」というのは、初爻は陽位であり、四爻は陰位であるから、位が異なるのである。そして、蕃山は四爻を「上卦の下に居て尊し」という。下卦の位が卑であるのに対して上卦の位は尊だからである。「九五の位に在す人、賢君ならざれば大に行事あたはず」というように、九五の位も尊い「君」の位である。「時」については、蕃山は九四を「内卦終て外卦始る」として、初爻と同じで「運氣あらたまらむ」と解釈している。そのため、「時いまだ至らず」という。しかも、「運氣あらたまらむとして、賢者生れ

30) 「易経小解」、313頁-314頁。

31) 中江藤樹「論語郷党啓蒙翼伝」(『藤樹先生全集』一、岩波書店、1940年)、410頁。「凡經濟之所<sub>レ</sub>遇、謂<sub>二</sub>之時<sub>一</sub>、時有<sub>二</sub>天地人之三境<sub>一</sub>、曰時、曰処、曰位也」とある。

32) 「易経小解」、308頁。

て世中文明也」によれば、時は天の「時運」,「天命」という意味になる。

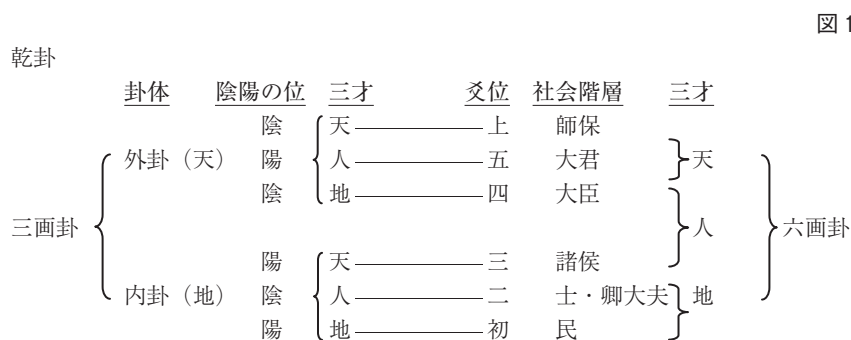
以上に見た通り、蕃山は「天地人」の抽象的概念を具体化して、藤樹の「時処位」を發揮して『易』を解釈している。これは蕃山に見られる一つの特色であろう。

## （二）爻位と社会階層

爻位を解釈するにあたり、蕃山は社会階層の象で解釈を展開した。たとえば、乾卦の爻辞「九二，見龍在田，利見大人」には、次のような解釈がある。

上卦は客位也。故に外卦とす。下卦は主意也。故に内卦とす。初は民也。民は国の本にて万古不易の者也。二は士也。士は民間より出て卿大夫ともなり、宰相の職とも成者也。是又古今の常也。三は下の上なれば、諸侯の位也。諸侯は世々其国を守て、天下を取る人に順從する者なれば、定理たる位也。故に内卦とし、主位とする也。五は大君の位なれ共、民の父母たる徳有る時は、天命を得て君たり。不徳なる時は、天命を失て匹夫たり。四の大臣も、君と、もに存亡する者なれば常ならず。上は師保の位也。大君賢なる時はあり、不賢成時はなし。古より四五上は天命の常なきに順て定まらず。故に外卦とし客位とする也<sup>33)</sup>

ここには卦の六爻を社会階層に配当する「爻位説」の解釈の特徴が見られる。これに似た解釈として鄭玄（127-200）に「初為元士（在位卑下），二為大夫，三為三公，四為諸侯，五為天子，上為宗廟」<sup>34)</sup>という説がある。しかし、蕃山は日本の事情に合わせて、六爻を「民・士卿大夫（宰相）・諸侯・大臣・大君・師保」<sup>35)</sup>の六位に配当している。鄭玄は諸侯を天子の下の第四爻に配置するが、蕃山は第三爻に配置する。また、蕃山が上爻に師保を配当するのも注意すべきである。乾卦を例としてまとめれば、次の図1のようになる。



33) 「易経小解」, 284頁。

34) 鄭玄『易緯乾鑿度』卷上（嚴一萍選『百部叢書集成』, 藝文印書館, 1969年）, 10頁。

35) 前掲注5「繫辭上傳」, 408頁。「初九ハ一卦ノ下也。民ノ位也。士其中ニアリ。兵ハ農兵ヲ本トスレバ也」とある。その士は武士の意味であろう。ここでは、蕃山は「二は士也。士は民間より出て卿大夫ともなり、宰相の職とも成者也」といい、「繫辭伝」の「士」と異なるところを注意すべきである。

「大君」という語は『易』の臨卦六五の爻辞の「知臨，大君之宜，吉」などの例から見れば，もともと天子の意味である。「繫辭伝」には「今日本ニテハ，天子此上位ニ当リ玉ヘリ。高ケレトモ民ナシ，尊ケレトモ実ノ位ナシ。九五ノ位ニ当レルハ大樹也」<sup>36)</sup>とあるから，中国と異なり，師保の位に居るのは日本の天子，天皇であり，大君の位に居るのは将軍になる。

乾卦上九の爻辞「亢龍有悔」に対して，蕃山は「上は君位の上に在といへども陰位也。臣にして君の上に居は師保の象也。……大君師保のしたがふべきなく，位を極て上たる時は，過て凶いたる，故に悔あり。龍ののほり過て，雲気をはなる時は落て身を傷るの悔あるがごとし。古より位を極め，威を極めて不失と云ことなし。故にことわざにも位だをれといへり。日本の王威を失ひ給ひ，足利家の末の亡たるこれ也」<sup>37)</sup>と解釈している。これに拠れば，蕃山は足利将軍家が滅んだことを事例として，将軍としての大君が師保に従わず，威を極めれば，結局「位」を失う「悔」があるという。ゆえに，「五は大君の位なれ共，民の父母たる徳有る時は，天命を得て君たり。不徳なる時は，天命を失て匹夫たり」というように，位と徳を対応させてこそ，大君はその位が保てるという政治思想を表明している。

乾卦九五の爻辞「飛龍在天，利見大人」では，蕃山は徳と位を天爵と人爵によって分けて述べる。

九は大君の徳、五は大君の位也。徳は天爵、位は人爵也。天爵人爵相応するは有道の世也。天子公卿諸侯大夫士は人爵也。善信美大聖神は天爵也。五は上卦の中にして、天位の初也。聖人にして此位に在すは、飛龍在、天の象也。<sup>38)</sup>

天爵・人爵は『孟子』の「有天爵者，有人爵者，仁義忠信，樂善不倦，此天爵也，公卿大夫，此人爵也」<sup>39)</sup>（『孟子』尽心篇上）に出る言葉である。蕃山は天爵は「善信美大聖神」と解釈しているが，これは孟子がいう「可欲之謂善，有諸己謂信，充實之謂美，充實而有光輝之謂大，大而化之之謂聖，聖而不可知之謂神」<sup>40)</sup>（『孟子』尽心篇下）に拠るものである。「善信美大聖神」という天爵の徳と，「天子公卿諸侯大夫士」という人爵の位とがともに応ずれば，「有道の世」になるわけである。

本田濟氏は，「初から上までの位にしても，漢易では，下から庶人，士，卿，諸侯，天子，宗廟と規定し，鄭玄，荀爽，虞翻みなこれによっているが，王弼は，上位者下位者の意識はあるにしても，具体的な社会階級とまではしない。そして初と上とを「無位の地」と規定する」<sup>41)</sup>と述べている。程頤は王弼本

36) 前掲注5「繫辭上傳」，408頁。また，大樹については，『国史大辞典』第八卷（国史大辞典編集委員会編，吉川弘文館，1987年，191頁）の「征夷大將軍」の条，「もとは陸奥の蝦夷（これを「夷」といい，日本海側のそれを「狄」と称した）征討のために，朝廷が臨時に派遣する軍隊の総指揮官を意味したが，のちには幕府首長の職名となった。唐名に因んで，大樹あるいは大樹将軍とも称す」とある。

37) 「易経小解」，287頁。

38) 「易経小解」，286頁。

39) 朱熹『四書章句集注』（中華書局，2011年），314頁。

40) 前掲注39『四書章句集注』，346頁-347頁。

41) 本田濟『易学』（平楽寺書店，1960年），219頁。



を用いたが、噬嗑卦の「初九履校滅趾，無咎」の爻辞で「乾上九云無位，爵位之位，非陰陽之位也」<sup>42)</sup> というように，初爻と上爻は「爵位之位」がないが，「陰陽之位」があると主張している。しかし，蕃山は「爵位」を取り入れるのみならず，天爵と人爵という対応関係で解釈を行っている。

また，蕃山は「五は上卦の中にして，天位の初也。聖人にして此位に在す」といい，五爻は天位の初であるから，上爻も天位であると述べている。需の上六「入于穴，有不速之客三人，来敬之，終吉」では，蕃山は上爻を天皇の位で解釈している。

上六のよく理に順て吉を得るは，日本神代の昔，大貴尊，天照皇の御孫瓊々杵尊に，此国を譲りて隠通し給へるがごとし。是三輪明神也。山を社として鳥井のみあり。巢穴に隠給へる象也。<sup>43)</sup>

蕃山は上爻の位が天皇のような師保であるというが，これは天皇崇拝と関連する。朱熹は「神即聖人之徳，妙而不可測者，非聖人之上復有所謂神也」<sup>44)</sup> といっており，蕃山は漢易の爻位説から道德論へ展開すると同時に，日本の天皇を「神代の昔」からの「神」の子孫として認めている。蕃山は天皇は実権がないけれども，日本文化の象徴としては無視してはいけないと主張していたようである。このように，上爻に師保を配当することは蕃山の易学思想を特徴づけるものとして注意すべきである。

### （三）一爻為主・中位・応位

爻位については，蕃山はまた「一爻為主」・「中位」・「応位」で解釈している。坤卦六二の爻辞「直方大，不習無不利」について，朱熹，程頤，蕃山の解釈を見てみよう。

【朱熹】柔順正固、坤之直也。賦形有定、坤之方也。徳合無疆、坤之大也。六二柔順而中正、又得坤道之純者。<sup>45)</sup>

【程頤】二、陰位在下、故為坤之主、統言坤道中正在下、地之道也。<sup>46)</sup>

【蕃山】坤は純陰の卦なれば、六二陰爻にして陰位に居。内卦の中を得たり。中正にして下に在は地の道也。故に坤の主とす。<sup>47)</sup>

朱熹は坤卦の義である柔順で解釈している。六二は中正であるから，坤道の純だといっている。蕃山は程頤により六二を「坤の主」として解釈している。坤卦の六二は，六は陰爻で，二は陰位である。六二は陰爻が陰位に居り，また二は内卦の中であるから，中正である。程頤の解釈と似ているが，それは

42) 「周易程氏伝」，804頁。

43) 「易経小解」，370頁。

44) 前掲注7『朱子語類』卷九十四，2397頁。

45) 『周易本義』，45頁。

46) 「周易程氏伝」，708頁。

47) 「易経小解」，327頁。

「一卦之体，必由一爻為主」<sup>48)</sup>と主張した王弼の義理派の特徴的解釈と言ってもいい。

「中位」とは二爻，五爻のことをいうが，それ以外の位についてはどうだろうか。試みに坤卦六四の爻辞「括囊，無咎無誉」と，蒙卦六三の爻辞「勿用取女，見金夫不有躬，無攸利」を見てみよう。

六四は陰爻にして、陰位に居て、中を得ざる者也。<sup>49)</sup>

六三は陰柔にして陽位に居。不中不正、女の蒙暗、妄りに動の象也。<sup>50)</sup>

陽爻が陽位に居り，また陰爻が陰位に居る場合，これを「得位」という。一方，陽爻が陰位に居り，陰爻が陽位に居れば「不得位」である。これが一般的な吉凶を判断する方法である。六四は，陰爻にして陰位にあるが，中を得ていない。また六三は，陰爻にして陽位にあるから，不中不正というのである。

また，「応位」については蒙卦九二の爻辞「包蒙吉，納婦吉，子克家」と，訟卦九二の爻辞「不克訟，婦而逋，其邑人三百戸無眚」を例として見てみよう。

九二剛明の才ありて、六五の君と志相応也。君臣共に中徳同じ。故に大君時の蒙を開発する道を任ず。<sup>51)</sup>

九五九二相応なれども、五も二も剛なれば相敵して不与。九二剛を以て陰に居て訟の身なれども、九五の君位に敵すべからざる事を知、故に婦て逋る也。<sup>52)</sup>

「応位」は初と四，二と五，三と上の対応関係をいう。九二の陽爻と六五の陰爻は陰陽の対応だけではなく，二五の君臣の位の対応関係でもある。蕃山は爻位の「主」・「中」・「応」で卜筮の吉凶を判断したり，人の徳と位が適っているかどうかを判断したりしている。

## 二 治道と易理

蕃山は占の体例において，社会階層を爻位に配当して解釈しているが，同時に，その爻位説を大いに發揮して治道で易を解釈するという特色も見られる。

### 1 治道と君子の四徳

蕃山は君子と小人を尊卑・貴賤の位に拠って分けている。

---

48) 前掲注15「周易略例」，273頁。

49) 「易経小解」，329頁。

50) 「易経小解」，359頁。

51) 「易経小解」，357頁。

52) 「易経小解」，376頁。

君子を陽とし小人を陰とす。本君子小人は善悪に非ず、位を以ていへり。気清質正しき者は君子也。王公侯卿大夫士の位に居べき者也。気濁質偏なるものは小人也。農工商の庶人と成て力を勞し、君子に従て財用を生ずべき者也。君子はすくなく小人は多し。……故に聖人常に君子を助て、小人を抑へ給。陽は尊く陰は卑し。君子は貴く小人は賤し。尊卑貴賤の位正しきは有道の世也<sup>53)</sup>

君子が「王公侯卿大夫士」の位に居るべきで、君子の徳は治道にかかわっている。乾卦文言伝「君子行此四徳者、故曰、乾元亨利貞」では、蕃山は「ここに天の四徳を君子の行ところとのたまふは、天徳人性不二の理を示し給也<sup>54)</sup>と解釈している。「元亨利貞」の天の四徳を、「仁義礼智」の人性の四徳で解釈したのは朱熹の思想に拠るのである。

また乾卦文言伝「君子体仁足以長人、嘉会足以合礼、利物足以和義、貞固足以幹事」について、朱熹、程頤、蕃山は次のように解釈している。

【朱熹】以仁為体、則無一物不在所愛之中、故足以長人。嘉其所会、則無不合礼。使物各得其所利、則義無不和。貞固者、知正之所在而固守之、所謂知而弗去者也、故足以為事之幹。<sup>55)</sup>

【程頤】体法於乾之仁、乃為君長之道、足以長人也。体仁、体元也。比而効之謂之体。得会通之嘉、乃合於礼也。不合礼則非理、豈得為嘉？非理安有亨乎？和於義乃能利物。豈有不得其宜、而能利物者乎？貞一作正。固所以能幹事也。<sup>56)</sup>

【蕃山】君子は仁を体にす。人に長たるに足れりとは、家の長は親也。国の長をも親方與親といへり。皆親愛にあらざれば、人に長たるに不足。況や国君は民の父母也。大君は天下の父母也。皆仁を体にして上に在す天理の当然也……礼は人道の盛なる也。楽其中に有り。礼楽は人道の善尽し、美尽す所也。故に嘉会は礼に叶に足れり。衆美の会、郁々乎として文也……世俗義は無欲にして、利に便せざれば行がたしとす。この故に好所の欲に随て義にたがへり。……欲に随て行へば、人の怨多し。和を失て凶をまねくの本也。義に順て行ときは、人の怨なし。人倫和して我心和す。物に利して義を和する慮也。故に人道は義を以て利とす、無窮の利也……貞は正也。正しく堅きは知ことの深き也。幹は木の身也。枝葉の依て達する本也。天下の万事は枝葉のごとく。知は幹のごとし。幽明邪正、是非善悪、人情時変、明に照して不惑、変に通じ、時に中して政令可にあたる故に、衆人いとふ事なし。治体正しく紀綱堅し、小事大事天下の本幹也<sup>57)</sup>

朱熹も程頤も「体仁」・「嘉会」・「利物」・「貞固」に基づいて解釈をしているが、蕃山はそれをふまえつつ「長人」・「合礼」・「和義」・「幹事」の方に重点を置いて解釈を行っている。そして、蕃山の解釈に

53) 「易経小解」, 326頁。

54) 「易経小解」, 298頁。

55) 『周易本義』, 35頁。

56) 「周易程氏伝」, 699頁。

57) 「易経小解」, 297頁。

よれば、「仁・礼・義・知」は「性」の理だけではなく、治道の「理」も含んだものである。

「仁」については、程頤が「君長之道」と解釈しているように、蕃山も「足以長人」の「長」を「上に在す」「家の長」や「国の長」として説いている。「礼」については、楽と合わせて、治道の礼楽と解釈している。朱熹と程頤は「楽」を解釈に取り入れていない。「義」については、物に利して義を和して、人の怨みのない政道を行うことと見ている。「知」については、事の「正」を「知」ってから、「堅く」守るという朱熹の解釈と異なって、蕃山は「幽明邪正，是非善悪，人情時変，明に照して不惑，変に通じ，時に申して政令可にあたる故に，衆人いとふ事なし」と述べており、「知」は万事万物の多様な変化を知るという「心」のはたらきであり、それが政令を通して実現されるという。

朱熹は「貞者，生物之成，実理具備，隨在各足，故於時為冬，於人則為智，而為衆事之幹」<sup>58)</sup>と解釈しているが、貞とは理であり、人の性の「智」である。それに対して、蕃山は「貞は知也，心の神明也，是非美悪を照らして，国家の財用をつかさどる徳也」<sup>59)</sup>といい、貞が「知」であり、「是非美悪」をはっきり見分ける能力であるとする。これは、知を静止したものではなく、「国家の財用」「治体」を定める能動的なはたらきととらえるものである。「明に照して不惑」，「変に通じ」る貞の「知」は「知善知悪是良知」<sup>60)</sup>という王守仁（1472-1529）の説に相い通ずるものといえよう。

そして、貞の「知」は「元亨利貞」にどう位置づけられるかについて、蕃山は次のように答えている。「或問，貞を本と言ひ，又元亨を本と云は何ぞや。云，仁は徳を成の本也。知は大業を行の本也。たがひに其根をなす也」<sup>61)</sup>。つまり、「仁」は徳をなす本であり、「知」は大業を「行う」本であって、両者は互いに根をなしているのである。「故に仁政は仁政に不生，知に生ず。故に中庸に知仁勇を天下の達徳也といへり」<sup>62)</sup>と、蕃山は『中庸』の「知仁勇」の徳での「知」が「仁」と同じように「仁政」の治道において重要なものであることを強調している。

## 2 爻位と君臣の道

初は民であり、地位が低く、爵位がない。上は師保の位であり、「尊シテ位ナク」とされ、日本の天子、天皇に当たる。そこで蕃山は二・三・四・五爻の「士（卿大夫）・諸侯・大臣・大君」を多く議論した。位が徳と対応するように、身分に相当する職分論で解釈を展開している。

表 1

爻位	原文	蕃山の解釈
----	----	-------

58) 『周易本義』，35頁。

59) 「易経小解」，296頁。

60) 『王陽明全集』第一冊（呉光，銭明，董平，姚延福編，浙江古籍出版社，2011年），128頁。

61) 「易経小解」，291頁。

62) 「易経小解」，290頁。

63) 「易経小解」，364頁。

五爻（大君）	需卦の象伝「需有孚光亨，貞吉，位乎天位，以正中也」	天位は九五，大君の位也。天地人の三極並立て天子たる故に天位と云也。其徳なき時は虚位也。需の時，九五の大君陽剛正中にして天位に位し，人民の父母たる天職を任ず。……今陽明正中の君，上に位す。必仁政を行て天下を潤養すべし。……政善なれば，凶年にも餓死する者なし。是を政を以衆を養ふと云也。 <sup>63)</sup>
四爻（大臣）	乾卦の象伝「或躍，在淵進無咎」	九四は九五の君位に近く，九三の上にあれば，三公の象也。……九四進ては忠を尽さむことを思ひて君にせまる心なし。在 <sub>レ</sub> 淵は臣の分を不忘也 <sup>64)</sup>
三爻（諸侯）	乾卦の文言伝「終日乾々，与时偕行」	九三は下の上にて諸侯の位なれば，天下道あるにも道なきにも，国をすて去べき義なし。……天下道なき時は，大によき事はならざる者也。人民の父母たる愛敬を不失して，事は目に不立やうに進退損益すべし。道ある時は大君を助て，ともに仁政を行ひ，大君の干城と成べし。 <sup>65)</sup>
二爻（士・卿大夫）	乾卦の文言伝「易曰，見龍在田，利見大人，君徳也」	君徳也とは，九二は臣の位にして，執政の職にあたり。民の父母たる，仁心厚して徳の施し博し。 <sup>66)</sup>

上の表1に見るように，二爻五爻は中位にあり，応位関係にあるから，治道において最も重要である。二爻の「士卿大夫」は「執政」の職であり，五爻の「大君」の「仁政」に応じる。「聖人上に作て大君の位を得給時は，必下に賢者出て，相応じ相助て，ともに天位を共にし，共に天禄を共にして，天下を利濟する者也」<sup>67)</sup>と，蕃山は位の「相応」を強調した。

三爻は諸侯の位である。天下に道ある時，「大君を助て，ともに仁政を行ふ」のである。爻位説によれば，三爻はがんらい上爻に応じるものだが，「上九は相応なれども，君にあらず。君は九五の大君也。上九は師保の位也。三の諸侯と相応は国の大君と師同じくする也。師を同じくするは道と同じくする也。諸侯は大君の徳とも大君の政を以て国の政とす。如此ならざれば大君を助て四海に施すこと叶はず」<sup>68)</sup>という蕃山の解釈では，三爻は二爻とともに五爻に応じるのである。この説が妥当であるか否かはともかく，「問，此説有や。云，定めて古人の説も有べし。いまだしらず。たとひなくとも易の象をとり，理をとる事は無窮也。窮あるは易にあらず」<sup>69)</sup>という問答から，蕃山独自の解釈をうち出したものであることがわかる。

四爻は初爻の民と相応するが，蕃山は「九四は九五の君位に近く，九三の上にあれば，三公の象也」と述べ，「九四は三公ノ位也。世々ノ大臣也。大君ノ次ナレトモ陰ノ位ニシテ権ヲトラズ。権ヲトル時ハ天下ニモ害アリ。其家ニモ凶なり」<sup>70)</sup>と説明しており，九四は世襲の大臣であり，大君に近くても，権を取る場合は害をもたらすという。すなわち，九四は三公の位であり，諸侯と卿大夫のように，大君に忠を尽すべきなのである。

64) 「易経小解」，294頁-295頁。

65) 「易経小解」，307頁。

66) 「易経小解」，301頁。

67) 「易経小解」，303頁。

68) 「易経小解」，379頁。

69) 「易経小解」，379頁。

70) 前掲注5「繫辞上傳」，408頁。

このように、蕃山は爻位の高低貴賤に着目し、身分制と職分論によって『易』における「君臣」の理を解釈している。ここでは応位よりも中位のほうが重んじられるという特徴もある。蕃山は五爻の大君の位を何より重要視しているのである。

### 3 「夫婦」の道と「父子」の道

蕃山は坤卦において、女道について述べている。坤卦の文言伝「君子黄中通理，正位居体，美在其中，而暢於四支，発於事業，美之至也」の解釈を見てみよう。

乾坤は大父母なれば、男女ともに乾にも似、坤にも似也。勇健に雄々しきは乾に似、黄中通理は坤に似たる人を君子と云也。専坤に似て、内文明にして惑なく、外柔順にして女しく、貞節に至て其志を奪べからざるは、乾にも似て正しく、勇健なるを賢女と云也。賢男には嘉言善行共にあり。賢女には善行多して嘉言まれ也。不知にはあらず。知所の善を行に発して、言に発せざるを女道の常とする也<sup>71)</sup>

乾坤は大父母であるから、女子は男子と同じく、乾にも似、坤にも似る。賢女は柔順と勇健の徳を持っている。しかし、蕃山は善行を多くして、発言を控える常道としての女道を肯定し、婦道といった場合、夫に従わなければならないと述べている。同じ坤卦の文言伝「後得主而有常」と、六二の爻辞「直方大，不習無不利」の解釈を見てみよう。

婦は夫を先にして己を後にす。臣は君を先にし己を後にす。共に主ある事を得て常の道也<sup>72)</sup>

妻の道也。臣の道也。妻の道臣の道にとりて受用生る事は、直は不<sub>レ</sub>曲、かくす事なし。<sup>73)</sup>

婦・妻は夫を先にし、素直で、隠すことがないように夫に従う徳が要求された。蕃山は「夫婦」の道を君臣の道と同様に見なしている。また、父子の道についてはどうだろうか。蒙卦九二の爻辞「包蒙吉，納婦吉，子克家」の解釈を見てみよう。

子克<sub>レ</sub>家は、家に在ては、父は君のごとく、子は臣のごとく、小家なれば父にかはるほどの良臣はなければ、幸子善にして才あれば家事をまかするなり。是父の子の我にまされるを知て信任する也。<sup>74)</sup>

71) 「易経小解」, 337頁。

72) 「易経小解」, 333頁。

73) 「易経小解」, 327頁。

74) 「易経小解」, 357頁。

蕃山は「夫婦」・「父子」の道を「君臣の道」のように見なしている。これは、「齐家」の理と「治国」の理は同じということであり、また儒教の「三綱」（君は臣の綱，父は子の綱，夫は妻の綱）という政治思想を易の解釈に取り入れていることになる。

#### 4 歴史と人事の理

蕃山には歴史を引用して易理を解釈するところが多く見られるが、中国史の例もあれば、日本史の例もある。

中国史の例としては、乾卦の象伝「乾道變化，各正性命，保合大和，乃利貞，首出庶物，万国咸寧」と、坤卦の象伝「含弘光大品物咸亨」に次のような解釈が見られる。

天地の仁恩は廣大故に人しらず。堯舜之君政を以て天下の衆を養ひ給ふ。仁政廣大なれば民しらざるがごとし。<sup>75)</sup>

昔夏桀勇力衆にすぐれて鉄を索にす、其力をたのみ持て徳をつとめず。終に成湯の為に滅されたり<sup>76)</sup>

堯舜の例は賢明の君主の道を説明したものであるが、徳がない桀の例は悪例である。このように歴史上の人事に当てはめるという方法は易の解釈に多く採用されているが、蕃山は中国史だけではなく、日本史の例も取り入れた。坤卦の文言伝「陰疑於陽必戰，為其嫌於無陽也，故称龍馬，猶未離其類也。故称血焉，夫玄黄者，天地之雜也。天玄而地黄」と、乾卦の象伝「或躍，在淵進無咎」について次のような解釈を下している。

平の清盛初は五位にて、昇殿をだにゆるされず、甚微なりしかども、漸々進て太政大臣にのほり、一門は云に及はず、公家の官禄をも心のまゝに取行ひ、武人大君の勢なりしかば、嫌はれて平氏を亡さんの御企あり、却て清盛におしこめられ給へり。しかれども清盛小人にて、悪逆甚しかりしかば、わづかに二十余年さかへて、源の頼朝に平氏ことごとく亡されたり。それより大君も永く天下を失ひ給へり。<sup>77)</sup>

四は人爻の上なれ共、陰位也。其身陽剛なる故に、或は躍り、或は進といへども、其位をわすれず、可を量り時に適が故に無咎。……後世大臣の禄をすくなくすれども、威勢をたのみて乱をなす者あり。石田三成が類也。<sup>78)</sup>

75) 「易経小解」, 291頁。

76) 「易経小解」, 320頁。

77) 「易経小解」, 338頁。

78) 「易経小解」, 294頁。

蕃山の解釈では、平清盛（1118-1181）の例で人事を議論している箇所が多く見られる。平安時代の平清盛はもともと五位（日本の官位）という低い官位にいたが、徐徐に出世して太政大臣という大君の位にのぼった。しかし、悪逆無道で小人であったため、滅ぼされた。その例を通して、大君は徳がないと位を失うと戒めている。また石田三成（1560-1600）は、九四の位に居たが、位を忘れ、威勢を恃んで、乱をおこした。結局、1600年9月「関ヶ原」の戦いに敗れ、同年10月1日京都三条河原で処刑された<sup>79)</sup>。以上の事例は実は爻位と治道の関係をも反映した解釈といえよう。

蕃山は歴史の事例で易を解釈し、治道において位と徳が対応すべきだという人事のことわりを強調している。また、易理を利用して日本の歴史も合理的に解釈する点は、日本儒者の特色といえよう。

### 三 心法と易理

蕃山は占、治道のほかに、心法によって易理を述べている。

問、理学心法の別は何ぞや。云、理学則心法也。心法則理学也。心外に理なく理外に心なし。心外に向ときは心法を云て心学にあらず。心内に向時は、日用常行みな心法也<sup>80)</sup>

蕃山は「心外に理なく理外に心なし」といい、朱熹がいう「心固是主宰底意、然所謂主宰者、即是理也。不是心外别有箇理、理外别有箇心<sup>81)</sup>」の意に相に通ずるようにも見える。しかしながら、王守仁も「心即理也。天下又有心外之事、心外之理乎<sup>82)</sup>」といており、蕃山の「理学則心法」「心法則理学」という主張と考え合わせれば、蕃山は明らかに王守仁の心学（陽明心学）をふまえているといえる。蕃山は「心の外に向く」時は心学ではなく、心法というが、「心の内に向く」時は「日用常行みな心法」といっている。

#### 1 内に向く心法——「善」

心の内に向く時に、蕃山は「善」という心法で易理を解釈している。乾卦の文言伝「君子以成徳為行、日可見之行也」では、次のような解釈が見られる。

君子の日用常行徳を成を主意とする也。故に日々にみづからかへりみて、我行をみる也。行は善行也。君子は日々に善を行て徳をなせり。心内に向て善を積て徳をなし、人にしられん事を不求、独善を行事を樂めり。<sup>83)</sup>

79) 『日本史大事典』第四卷（下中弘編，平凡社，1992年），392頁。

80) 「易経小解」，341頁。

81) 前掲注7『朱子語類』卷一，4頁。

82) 前掲注60『王陽明全集』第一冊，2頁。

83) 「易経小解」，311頁。



日用常行に「善」を行うのは心法の練り方である。その場合、心は内に向いているので、「独善を行事を樂めり」ということになる。「善の大成者は、仁君、忠臣、慈父、孝子、義和の夫、貞順の婦、友愛の兄弟、信の朋友也。是五典十義の徳行也」<sup>84)</sup>と、蕃山は「善」を五典十義の徳行までつながると指摘しており、また「善」は在位の君子にとっても重要であることについても、蒙卦の象伝「童蒙之吉、順以巽也」で次のように述べている。

是在位の君子、童蒙に居の吉也。能如<sub>レ</sub>此なる時は、天下に優かなり。孟子に云、好善優於天下。註に曰、優ハ有<sub>レ</sub>余裕也。言ハ雖<sub>レ</sub>治<sub>レ</sub>天下<sub>レ</sub>尚有<sub>レ</sub>余力<sub>レ</sub>と也<sup>85)</sup>

すなわち、在位の君子も『孟子』（告子篇下）にいう「好善優於天下」が必要だと解釈された。ここに引かれる注は朱熹の『孟子集注』である。

また、蕃山は「善」を行うことが必要だとして、次のように述べている。

或問、元亨利貞は、天にある仁義礼知にて、理の四徳也といへども、天道は唯一元の氣、春始て生じ、夏長ずるを亨とし、秋実結を利とし、冬収斂するを貞とするのみ。……四徳も理とはみえず。云、しかり。所<sub>下</sub>以有<sub>レ</sub>此物<sub>レ</sub>便有<sub>中</sub>此氣<sub>上</sub>。所<sub>下</sub>以有<sub>レ</sub>此氣<sub>レ</sub>便有<sub>中</sub>此理<sub>上</sub>といへり。元亨利貞は性也。生長収蔵は情也。仁義礼知は性也。惻隱羞惡辭讓是非は情也。天道は氣理に化し、理氣に合して理氣の分みがたし。唯至誠無息の本然、無声無臭至実にして無妄なる所を天理と知のみ。聖人の心もまた至実にして無妄也。不勉して中り、不思して得。従容として道に中るは形を踏む者也。情性に化す。故に天と聖人と理氣不分、賢人は少し分る。凡人は理氣性情大に分れたり。悪人は氣に随ひ、情に随て性理なきがごとし。聖賢の情は四端也。凡人の情は喜怒哀惧愛惡欲の七情のみ多し。四端は発すれども微也。悪人は七情主となりて、四端はまれ也。藹然たる四端、感にしたがひて著はるゝ事多き者善人也<sup>86)</sup>

ここで蕃山は朱熹がいう「所以有此物，便是有此氣。所以有此氣，便是有此理」<sup>87)</sup>に拠り答えている。しかし、蕃山は「天道は氣理に化し、理氣に合して理氣の分みがたし」といい、「理氣合一」を主張している。これは「未有此氣，已有此性，氣有不存，而性却常在。雖其方在氣中，然氣自是氣，性自是性，亦不相夾雜」<sup>88)</sup>という朱熹の説と異なり、理と氣の統合を強調するものとなっている。

朱熹は「論天地之性，則專指理言，論氣質之性，則以理与氣雜而言之」<sup>89)</sup>というが、蕃山は「天と聖人と理氣不分」といい、聖人の「性情」を天道の「理氣」と同じものであると見なしている。

84) 「易経小解」, 334頁。

85) 「易経小解」, 361頁。

86) 「易経小解」, 340頁。

87) 前掲注7『朱子語類』卷六十八, 1690頁。

88) 前掲注7『朱子語類』卷四, 67頁。

89) 前掲注7『朱子語類』卷四, 67頁。

一方、賢人は少し理気が分かれているが、聖人と同じく、情は「仁義礼智」の性の四端である。すなわち「惻隱之心、仁之端也。羞惡之心、義之端也。辭讓之心、礼之端也。是非之心、智之端也」<sup>90)</sup>（『孟子』公孫丑篇上）に拠る「四端」のことである。一方、凡人は情は喜怒哀惧愛惡欲の七情が多いから、四端は発しても「微」である。その中に、悪人は七情が主となり、四端の発現はまれである。しかし善人の場合、感情のはたらきにおいて聖賢と同じ四端が多く現れるのである。

蕃山は「善を人にとるは、人と共に善とする也。人とともに善を為を大知と云。されば大知は愚なるがごとし。天の貞徳にかなへり」<sup>91)</sup>と述べて、善を為すことは「知」であり、天の貞徳の「知」に適うことになるという。善を為すことは、四端のみならず、「知」を体得することでもある。王守仁は「人有習心、不教他在良知上实用為善去惡功夫……不過養成一個虚寂」<sup>92)</sup>、「為善則不善正了、亦是格不正以歸於正也。……若如此格物、人人便做得、人皆可以為堯舜、正在此也」<sup>93)</sup>と述べている。蕃山はこれに影響を受けたように思われる。日用常行において「善」を為すことが心法だという上述の見解も、こうした実践知の主張と関連している。

このように、自ら「善」を為して、内にある「知」を求めるというかたちで、蕃山は貞の「知」の概念を道徳論のみならず実践論へとつなげようとしている。

## 2 外に向く心法——「誠」・「敬」

心の外に向く場合、蕃山は「誠」と「敬」という心法で易理を解釈している。

問、卦は掛也。物象を懸掛て人に示す、是卜筮の為也。孔夫子初て理を説給は孔子の易也、八卦六十四卦、文王周公の經文も、卜筮のためならずや。云、孔子も伏羲の卦中にふくみ給へる理を述べ給ふ也。八卦六十四卦皆心法理学の原也。大極兩儀を生ず、大極は理也。理は本心也。大極は至誠にして無息。故に誠は天の道也。誠を思は人の道也。兩儀は一実一虚也。一は純一の誠也。一は敬也。兩相守るは敬の象也。陽は実なるが故によく施し、陰は虚なるが故に順て承。施は仁也。順てうくるは敬也。義也。誠敬仁義は、心法治道の要也。これ兩儀の心画に始れり。<sup>94)</sup>

太極の理は「至誠にして無息」であり、兩儀などの象を通して理が顕れる。蕃山は「理は本心也」といい、これは「八卦六十四卦皆心法理学の原也」という語とともに、蕃山らしい心学的易解釈といえよう。「一は純一の誠」、「一は敬」というように、心の「誠」と「敬」によって易理を解釈している。

誠については、蕃山は、乾卦文言伝九二「子曰、龍徳而成中者也、庸言之信、庸行之謹、閑邪存其誠」について、次のように解釈している。

龍は神通を得てよく靈変す。聖人神明の徳有りて、古今時処位の変に通じ、人民生む事なき政教を

90) 前掲注39『四書章句集注』、221頁。

91) 「易経小解」、282頁。

92) 前掲注60『王陽明全集』第一冊、129頁。

93) 前掲注60『王陽明全集』第一冊、131頁。

94) 「易経小解」、341頁。

成給にかたどれり。神徳の至は、人倫を明にし常を行に有り。故に龍徳にして、正中成者也とのたまへり。庸言之信、庸行之謹は、言の則は信也。行の則は謹也。言常に信有り、行常に謹あり。これ閑邪存其誠の道也。信謹間断なくば、邪いづくより来らんや。言行正して常あるは、其誠を存ずる也。誠は天の道也。誠を思は人の道也。<sup>95)</sup>

ここの「誠は天の道也、誠を思は人の道也」という解釈は、『中庸』<sup>96)</sup>と『孟子』（離婁篇上）<sup>97)</sup>に拠るのであろう。言の原則は信、行の原則は謹であるから、言・行の「信・謹」は、「誠」を思うことに通じるという。乾卦の文言伝「子曰、君子進徳修業、忠信所以進徳也、修辞立其誠、所以居業也」にも、蕃山は「修辞は、言は過やすく行は不足者也。身の行よりも言の過るは虚也。誠にあらず。故に誠を立むと欲する者は、言は行をかへりみ、行は言をかへりみて、言行一致に成やうに受用するを修辞と云う也」<sup>98)</sup>と解釈している。これも、言行一致であれば、「誠」であるという趣旨である。内在の「誠」は、外在の「言行」の「信・謹」によって表されることになる。

敬については、坤卦の文言伝「直其正也、方其義也、君子敬以直内、義以方外、敬義立而徳不孤、直方大、不習無不利、則不疑其所行也」をめぐって、蕃山は「敬」と「慎独」の心法を議論している。

人の生は直也。坤道の正也。天理自然の本体也。日本の神道にも、神は正直を以て体とし、慈仁を以て心とし、無事を以て奇特とすといへり。方は坤道の義也。君子敬を用て内を直くす。内は心也。心の正直は天理の自然也。是をみなして生るは幸にして免たり。君子義を用て外を方にす。適もなく莫もなし。義と共に従これ也。敬義は心の徳也。心に敬義立時は徳大也。<sup>99)</sup>

ここで、蕃山は日本の神道の「正直」で坤道を解釈している。「正直」は体であり、「敬」は心法である。「敬を用て内を直くす」というように、「敬」によって心を正すことで、正直に立ち返る。心の正直は「天理の自然」なのである。そして、「敬」は「慎独」の心法だとも言われている。「自反慎独の心法に付ては、敬と云。応事接物の法則に付ては義と云也。独知を慎ときは、心常に正直也」<sup>100)</sup>と、蕃山は外にある物事への応接の法則が「義」であるのに対して、内的な慎独を行う心法の原則は「敬」であるという。

『朱子語類』には「因問、先生許其説乾坤二卦本於誠敬、果否。曰、就他說中、此条稍是。但渠只是以可乾卦説「修辞立其誠」、閑邪存其誠、坤卦説「敬以直内」、便説是誠敬爾」<sup>101)</sup>という記述がある。「誠」「敬」で「乾」「坤」二卦を解釈するのは、もともと朱熹の発想であった。島田虔次氏は「誠敬、ことに敬がいかにか伊川、朱子の系統で重んぜられたかは周知のところであろう。ところが陸王では殆ど大した

95) 「易経小解」, 300頁。

96) 前掲注39『四書章句集注』, 32頁。「誠者、天之道也。誠之者、人之道也」を参照。

97) 前掲注39『四書章句集注』, 264頁。「是故誠者、天之道也。思誠者、人之道也」を参照。

98) 「易経小解」, 303頁。

99) 「易経小解」, 335頁。

100) 「易経小解」, 335頁。

101) 前掲注7『朱子語類』卷六十八, 1691頁-1692頁。

役割を演じていない<sup>102)</sup>と指摘している。蕃山が「誠」・「敬」を心法としてとらえ、それをもって乾坤二卦を解釈したのは朱熹の思想と深くかかわっていると見られる。ただし、朱熹との違いもある。「誠敬仁義は、心法治道の要也」「両儀の心画」などは、蕃山なりの特徴的な主張といえよう。

## おわりに

「易経小解」には、蕃山は朱熹の『周易本義』と程頤の「周易程氏伝」を参考にして、解釈を行っているところが多い。論旨は多岐にわたったが、最後に本稿での考察を整理してみよう。

第一に、蕃山は卜筮の体例である「取象説」・「取義説」・「爻位説」などの方法を採用している。社会階層の象と爻位説を積極的にとり入れる点で、象数易の特徴が見られるが、「時処位」や「師保」の位などの説には蕃山なりの解釈の特色も見られる。特に師保の位（上爻）に天皇を配当するのは、日本の実情をふまえての発想である。

第二に、蕃山は治道において、君子の徳、君臣の道、歴史の事例などを用い易理を解釈している。儒家の經典である「四書」に拠るところが多いことから、「経」を以て「経」を解釈する特徴があり、また「史」で「経」を解釈する特徴もある。

第三に、蕃山は心法の「善」・「誠」・「敬」などで易理を解釈しており、心の内に向く「善」の心法では陽明学の傾向が強いが、心の外に向く「誠」・「敬」の心法では朱子学（張載などを含む）の影響も見られる。ただし、「八卦六十四卦皆心法理学の原也」、「理は本心也」、「両儀の心画」などの言説は、朱熹と異なる心学的易解釈である。心法の面において蕃山は内在の道德と外在の実践を一体化しようとしている。

第四に、蕃山は神代の説を利用して、神道の「正直」に拠って『易』を解釈することなど、『易』を日本化して、日本の神道にあてはめようとしている。

以上のことをまとめると、「易経小解」において、蕃山は占・治道・心法から解釈を行っている。ここには、「象数易」の要素もあるが、「義理易」の特徴がより明確に見られる。また、蕃山は「王世貞云、昔伏羲氏八卦を画す、卜筮のために設るにあらず、後聖理と数と合せ見て、卜筮を借て理を明す、理を卜筮に帰するにあらずといへり<sup>103)</sup>と述べている。これは中国明代の思想家である王世貞（1526-1590）の語<sup>104)</sup>に拠る発言であるから、おそらく蕃山は明代の思想からも影響されたのであろう。蕃山の「易経小解」からは、漢儒、宋儒と明儒の思想をふまえたうえで日本儒者としての特徴を表そうとする傾向が窺えるのである。

## [附記]

本研究は中国広東省哲学社会科学学科共建項目「日本江戸時代陽明学派『易』学研究」(GD17XWW13)の助成を受けたものである。

102) 島田虔次『中国思想史の研究』（京都大学学術出版会、2002年）、84頁。

103)「易経小解」、339頁。

104) 王世貞『弇州四部稿』卷一百三十九（『景印文淵閣四庫全書』二版第1281冊、台湾商務印書館、2008年）、283頁。原文は「伏羲之画八卦也、豈以為卜筮設哉、後聖見理之与数合也、因借卜筮以發之盖即卜筮以明理也、非拳理而歸之卜筮也」という。